

「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ

川上郁雄（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

今日のポイント

- I. 「移動する子ども」学へ向けた視座（拙著、第1章）
- II. 「移動する家族」の視点：一青妙さんと家族（学会発表）
- III. 1974年の「移動する子ども」の語り

I. 移民の子どもはどのように語られてきたか

1. 問題意識：移民の子どもの語られ方

親の国籍、出身地、エスニシティなどで子どもが語られてきた。

「くくりかた」の死角、暴力性

「名付け」「名乗り」

→子どもが自分をどう考え、どう生きようとしているのか

=子どもの主体を議論する視点

2. 移民研究の動向

3. 日本の移民研究から

1. 「移民」の名称と移民の子ども
2. 「日系ブラジル人」の生成
3. 「中国帰国者」から「中国系ニューカマー」まで
4. 「在日コリアン」の子ども
5. 「海外在留邦人」の子ども
6. ①政治的視点（誰が何のために語るのか）
②研究史的視点（どの文脈で語るのか）
③目的論的視点（何をめざして語るのか）

川上の主張：

P. 27 複数言語環境で生きる子どもが複数言語と向き合い、

自らの生き方、アイデンティティをどう「名乗る」のか

実践者は子どもとどう向き合うのかという教育的課題こそ

4. 第二言語習得研究と分析概念の「移動する子ども」

1. ポスト構造主義的アプローチ批判
2. 「移動する子ども」という分析概念

5. 「第二言語教育」「継承語教育」から複数言語教育の「移動する子ども」学へ

II. 学会発表

1. はじめに：「移動する子どもと一青妙
2. 研究の視座
 1. 先行研究レビュー
 2. 分析概念としての「移動する子ども」
3. 「移動する子ども」という家族の歴史
 1. 一青妙著『私の箱子』（2012）の概要
 2. 分析
4. 考察
5. 結語

資料

川上郁雄（2013）

「幼少期より複数言語環境で成長した子どもの経験と記憶はその後の生にどのような影響を与えるのか—台湾と日本で成長した一青妙氏とその家族の歴史を例に—」
『2013年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 269 - 274.

III. 1974年の「移動する子ども」の語り

資料：

ヘンリー・一美・早瀬（1974）

「南カリフォルニアにおける日系人の日本語教育について」
『日本語教育』24号. Pp. 7 - 14.

参考図書

- 川上郁雄編（2006）『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える—』明石書店
- 川上郁雄編（2009）『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学—』明石書店
- 川上郁雄編（2009）『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育—動態性の年少者日本語教育学—』明石書店
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編（2009）『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版.
- 川上郁雄編（2010）『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー—』くろしお出版
- 川上郁雄（2011）『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版
- 川上郁雄（2012）『移民の子どもたちの言語教育—オーストラリアの英語学校で学ぶ子どもたち—』オセアニア出版.
- 川上郁雄編（2013）『「移動する子ども」という記憶とカ—ことばとアイデンティティ』くろしお出版